

立川キリスト教会オルガンコンサートシリーズ (第 18 回)

2017 年 4 月 16 日 午後 3 時開演

【プログラム】

合 唱

「この日こそ主の定められた日」

Haec Dies (1591) / William Byrd (1543-1623)

「十字架につけられ」

Crucifixus (c. 1715) / Antonio Lotti (1667-1740)

「共に宿りませ」

Abendlied Op.69, No.3 (1855) / Josef Gabriel Rheinberger (1839-1901)

「主の祈り」

Notre Pere (1978) / Maurice Durufle (1902-1986)

「主の祈り」

Notre Pere (1992) / Pierre Villette (1926-1998)

「主よ、私を覚えていてください」

Do Lord, Do Remember Me (2001) / Arr. Moses Hogan (1957-2003)

「聖母」

Mother of God (2004) / John Tavener (1944-2013)

「平和の祈り」

Peace (2013) / Paul Mealor (1975-)

「子羊」

The Lamb (2015) / Kim André Arnesen (1980-)

～休 憩～

会衆賛美

「主われを愛す」 希望の讃美歌 251 番

オルガン

パストラーレ ハ長調 / D.ツィポリ

Pastorale / D.Zipoli (1688-1726)

ベルガマスカ / G.フレスコバルディ

Bergamasca (Fiori Musicali) / G.Frescobaldi (1583-1643)

わが魂は主をあげめ (フーガ) BWV733 / J.S.バッハ

Meine Seele erhebet den Herren (Fuga sopra il Magnificat) / J.S.Bach (1675-1750)

イエス、わが信頼 BWV728 / J.S.バッハ

Jesus, meine Zuversicht J.S.Bach (1675-1750)

英雄的小品 / C.フランク

Pièce héroïque / C.Franck (1822-1890)

【プログラム解説】

[合唱]

今年は今日がイースターです。キリストの「受難と復活」に関連した曲を集めてみました。同時にこれらの作品は『平和』と『祈り』をテーマにした音楽でもあります。キリスト教の歴史は常に争いと隣り合わせの歴史でもありました。カトリックとプロテスタントの争い、他の宗教との争い、政治的な争いに教会も巻き込まれた時代、二度の世界大戦の中で苦しんだ時代、そして世界が宗教、文化、国籍によって分断されつつある今。キリスト教音楽がそれぞれの時代ごとに、どのように「平和」と「祈り」を表現してきたのでしょうか。ほんの一部ですが、今日、作曲年代順に演奏していくなかで、作曲家たちがどのような思いで戦争とその犠牲者を見つめ、それぞれの思いを表現しているのかを想像しながら聞いていただけたらと思います。

Haec Dies (1591) 「この日こそ主の定められた日」

William Byrd (1543-1623)

イギリスのチューダー朝を代表する作曲家。この曲は、詩篇 118 篇 24 節を用いており、主にイースターに歌われる。宗教的なモテットより、マドリガルに近いスタイルで書かれている。舞踊的な三拍子のリズムによってイースターの喜びを表現している。

Haec dies quam fecit Dominus.	この日こそ主の創り給いし日。
Exultemus, et letemus in ea.	歓べ、喜べ、この日ゆえに。
Alleluia.	アレルヤ。

Crucifixus (c. 1715) 「十字架につけられ」

Antonio Lotti (1667-1740)

この曲のスタイルからルネッサンス時代と思われがちであるが、バッハとほぼ同時期に活躍した後期バロックのイタリアの作曲家。実際には幅広いジャンルの曲を作曲し、多くの新しい技法を取り入れ、古典音楽への橋渡しに貢献したと言われているが、宗教曲に限っては、対位法やルネッサンスの作曲法を多く用いていた。この曲もそのうちのひとつで、彼の最も有名な作品であろう。半音階的モチーフがキリストの十字架というテーマをさらに劇的に表現している。

Crucifixus etiam pro nobis :	十字架につけられ
sub Pontio Pilato passus,	ポンテオ・ピラトのもとにて苦しみを受け
et sepultus est.	我らのために葬られたまえり

Abendlied Op.69, No.3 (1855) 「共に宿りませ」

Josef Gabriel Rheinberger (1839-1901)

エマオという町に向かっていたイエスの弟子二人が同じ方向に歩いていた一人の旅人が復活されたイエスであることに気がつかない。夕暮れ時になって、その旅人に「私たちと共に泊りください」と引き止めたことに由来する曲。Rheinberger が 15 歳のときに作曲した。

Bleib bei uns,	一緒にお泊まりください
denn es will Abend werden,	そろそろ夕方になりますし
und der Tag hat sich geneiget.	もう日も傾いていますから

(ルカによる福音書 24 章 29 節)

Notre Pere (1978) 「主の祈り」

Maurice Durufle (1902-1986)

数多くの作曲家が「主の祈り」を曲にしているが、この曲は、フランスのオルガニスト、作曲家であった Maurice Durufle による。彼は 1962~65 年のバチカン公会議での各国語のミサへの転換には否定的であったが、母国語であるフランス語での「主の祈り」を作曲している。

Notre Père qui es aux cieux, que ton nom soit sanctifié, que ton règne vienne,
que ta volonté soit faite sur la terre comme au ciel. Donne-nous aujourd'hui notre pain de ce jour.
Pardonne-nous nos offenses, comme nous pardonnons aussi à ceux qui nous ont offensés.
Et ne nous soumetts pas à la tentation, mais délivre-nous du Mal.

天にまします我らの父よ、願わくは、御名をあがめさせたまえ。御国を来たらせたまえ。御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ。われらの日用の糧を、今日も与えたまえ。われらに罪を犯す者をわれらが赦すごとく、われらの罪をも赦したまえ。われらを試みに会わせず、悪より救い出したまえ。(国と力と栄えとは、限りなく汝のものなればなり)

Notre Pere (1992) 「主の祈り」

Pierre Villette (1926-1998)

Durufle の弟子でもあったフランスの現代の作曲家 Villette による「主の祈り」。フランスらしさに溢れた作品で、シンプルながらも 20 世紀フランスの色彩あふれるハーモニーを用いている。シャンソンやジャズにも影響を受けた。アヴァンギャルドのような斬新さよりも古典を大切にされた技法によって、落ち着いた、清らかな雰囲気をもった曲。

Do Lord, Do Lord, Do Remember Me (2001) 「主よ、私を覚えていてください」

編曲 Moses Hogan (1957-2003)

米国南北戦争時代の黒人霊歌。原曲は、リパブリック讃歌 (The Battle Hymn of the Republic) を書いたとされる奴隷制度廃止運動家 Julia Ward Howe (1819 - 1910) によるものとされている。子供の歌として親しまれてきたが、この編曲は Moses Hogan によるもの。2003 年に 45 歳の若さで亡くなったが、多くの黒人霊歌をアカペラ合唱のために編曲したことで知られている。歌詞の内容は、キリストが二人の強盗と共に十字架にかけられた時、強盗の一人がキリストに対して言った一言に由来している。ベウラという地名は旧約聖書イザヤ書 62 章 4 節「神の宿るところ」の意。天国を表す比喩として使われている。

「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。

(ルカによる福音書 23 章 42 節)

Do, Lord, oh do Lord, Lord remember me
Way beyond the sun.

主よ、主よ、私を覚えていてください。
太陽の向こうで。

I got a home in Beulah land that outshines the sun

太陽よりもまぶしい家をベウラの地に
持っていますから、

I got a robe in Beulah land that outshines the sun

太陽よりもまぶしい衣をベウラの地に
持っていますから、

I got a crown in Beulah land that outshines the sun

太陽よりもまぶしい冠をベウラの地に
持っていますから、

I got a mother in Beulah land that outshines the sun

太陽よりもまぶしい母親をベウラの地に
持っていますから、

I got a father in Beulah land that outshines the sun

太陽よりもまぶしい父親をベウラの地に
持っていますから、

I got a saviour in Beulah land that outshines the sun

太陽よりもまぶしい救い主をベウラの地に
持っていますから、

Mother of God (2004) 「聖母」

John Tavener (1944-2013)

ミニマリズムに基づいたシンプルな構造ながらも、美しさと、現代の社会と、現代人の心の光と影を表現した作風をもった作品。特に晩年の作品は、ロシア正教だけでなく、宗教一般を題材にし、イスラムやヒンズーなどのテーマを用いて作曲をしている。この歌詞はロシアのロマン派の詩人 Mikhail Lermontov によるもので、Tavener は前半のみを用いている。詩の途中で曲が終わることによって大きな疑問と、解決しないやりきれない気持ちを残そうとしたように見える。形式は聖母マリヤに対して祈っているが、戦争や、犠牲になっている子供達、それに対して何もできない大人たちを冷静な目でみているのか、諦めの気持ちも混じっているのか？

Mother of God, here I stand now praying,	神の母よ わたしは今ここに立って祈ります。
Before this icon of your radiant brightness,	あなたの輝くイコンの前で、
Not praying to be saved from a battlefield,	戦場からの救いを祈るのではなく、
Not giving thanks, nor seeking forgiveness	感謝の祈りを捧げるのでも、
	ゆるしを求めるのでもなく、
For the sins of my soul, nor for all the souls.	私の罪のためでもなく、
	人類の罪のためでもなく、
Numb, joyless and desolate on earth,	心が何も感じなくなり、喜びもなく、
	荒れ果てたこの地球にのこされて、、、
But for her alone, whom I wholly give you.	でも、わたしの全てをささげる方のために、、、

Peace (2013) 「平和の祈り」

Paul Mealor (1975-)

有名なアッシジのフランシスコの祈りを歌詞にした曲。ポピュラーな Sebastian Temple による Make me a channel of your Peace を編曲したもの。Mealor は 2011 年にアフガン戦争に派遣されたイギリスの兵隊の妻たちで結成された「軍人の妻合唱団」のために書いた Wherever You Are が大ヒットしている。

Make me a channel of your peace.	私をあなたの平和をもたらす手段にお使いください
Where there is hatred let me bring your love.	憎しみのあるところにあなたの慈愛を運ばせてください
Where there is injury, your pardon, Lord	信仰に疑いを持つ人がいても
And where there's doubt, true faith in you.	私は心から信じています
Make me a channel of your peace	私をあなたの心の平穏をもたらす手段にお使いください
Where there's despair in life, let me bring hope	人生に絶望している人のところに 希望を運ばせてください
Where there is darkness, only light	暗闇の中に 唯一の光を
And where there's sadness, ever joy.	悲しみのあるところに 大いなる喜びを
Oh, Master grant that I may never seek	主よ 聞き届けてください
So much to be consoled as to console	慰められることよりも 慰めることなのです
To be understood as to understand	理解されることよりも 理解することなのです
To be loved as to love with all my soul.	愛されることよりも 全身全霊をもって 愛することなのです
Make me a channel of your peace	私をあなたの平和をもたらす手段にお使いください
It is in pardoning that we are pardoned	許すことによって 私たちは許されるのです
In giving to all men that we receive	すべての人々に与えることによって私たちは与えられます
And in dying that we're born to eternal life.	命を捧げることによって 永遠の命を得ることができるのです

Make me a channel of your peace.
Where there is hatred let me bring your love.
Bring your peace Lord, in your peace.

The Lamb (2015) 「子羊」

Kim André Arnesen (1980-)

2016年のグラミー賞にノミネートされた、現在注目されているノルウェー出身の作曲家。歌詞は William Blake (1757-1827) による有名な詩 The Lamb。子羊は「罪のない」ものの象徴であると同時に、キリストをも表している。ユダヤの儀式のなかで、傷のない子羊が人の罪を贖うために犠牲として捧げられた。新約聖書は、キリストがその子羊のように、私たち人類のために犠牲となって十字架で死なれたと説く。それによって、すべての人の罪がゆるされ、キリストの復活によって、人は罪の結果である死から解放される、というのがキリスト教の信じているところである。

Little Lamb, who made thee?	子羊よ、だれがあなたを造ったのか？
Dost thou know who made thee?	だれがあなたを造ったのか知っているか
Gave thee life, and bid thee feed,	あなたに命をあたえ、養い、
By the stream and o'er the mead;	ながれのほとりに、みどりの牧に
Gave thee clothing of delight,	すばらしい衣をあたえ、
Softest clothing, woolly, bright;	柔らかい衣、ウールの輝く衣を与え、
Gave thee such a tender voice,	あなたにそのやさしい声をあたえ、
Making all the vales rejoice?	谷間にいる仲間をよろこばせ、
Little Lamb, who made thee?	そのあなたを造ったのは誰か？
Dost thou know who made thee?	誰があなたを造ったのか知っているか？
Little Lamb, I'll tell thee,	子羊よ、私が教えよう。
Little Lamb, I'll tell thee.	子羊よ、私が教えよう。
He is called by thy name,	その人はあなたの名前で呼ばれる。
For He calls Himself a Lamb.	彼みずから自分は子羊だと言っているから
He is meek, and He is mild;	その人は柔和で、優しい
He became a little child.	その人は一人の子供となった
I a child, and thou a lamb,	私は子供、あなたは子羊
We are called by His name.	私たちはその人の名前で呼ばれる
Little Lamb, God bless thee!	子羊よ、神があなたを祝福されるように
Little Lamb, God bless thee!	子羊よ、神があなたを祝福されるように

[オルガン]

パストラレ ハ長調 / D.ツィボリ (1688-1726)

もともとパストラレとは、クリスマスの季節に、羊飼いらが路上を歩きながらシャルマイ（チャルメラの語源となったオーボエのような楽器）を吹き鳴らしローマの街に入り、キリストの誕生を祝うという習慣・旋律が題材となった音楽である。この曲は、明るくおどけたイタリア的旋律が印象的。和音進行を無視したかのような低音の持続音はオルゲルプンクトと呼ばれる。

ベルガマスカ / G.フレスコバルディ (1583~1643)

フィオーリ・ムジカーリ（音楽の花束）はフレスコバルディによる典礼オルガン音楽の曲集で、ローマの聖ピエトロ大聖堂のオルガニストだった頃、1635年にベニスで出版された。それは3つのオルガン・ミサと二つの非宗教的な狂想曲から出来ており、フレスコバルディの最高作品の一つとみなされ、J.S.バッハを含め後世の作曲家に大きな影響を与えた。ベルガマスカはこの曲集のハイライトの一つで、4つの主題（メロディーとそのバスに由来）が7つのセクションにおいて、様々な形に変化し組み合わされる。この手法は1608年の「ファンタジー」の中にも見られる。

わが魂は主をあがめ（フーガ） BWV733 / J.S.バッハ (1675~1750)

マニフィカトとは、受胎告知の後にエリサベツのもとを訪問したマリアによる祈り（ルカによる福音書1章46~55節）に基づく聖歌である。このコラール旋律がフーガとなって手鍵盤の様々なパートに現れ、最後は足鍵盤に現れて曲を締めくくる。バッハ20代後半~30歳前後の作品と考えられている。

[元コラール歌詞]

わが魂は主をあがめ わが霊は、救い主なる神を喜びまつる
この卑しいしもべさえ、顧み給うた
見よ、今から後、代々の人々は 私を祝福の人と言うでしょう

イエス、わが信頼 BWV728 / J.S.バッハ (1675~1750)

アンナ・マグダレーナ・バッハのための音楽帳に自筆譜が残っている。復活祭（イースター）のコラールをもとにした3声部の曲で、定旋律には豊かな装飾が施されている。

[元コラール歌詞]

イエス、わが信頼 そして、わが命の救い主 それを知り、また固く信ず。
希望に加え安らぎを与えんことを。 今だに悩み多く残る夜にても。

英雄的小品 / C.フランク (1822~1890)

ナポレオン3世が退位し、フランスが第三共和制をとったあと間もなく、1878年のパリ万国博覧会の際に5000席のコンサートホールが建造され、そこにフランスで最初の大きなコンサートオルガン（カヴァイエ=コル製、66ストップ）が設置された。このオルガンのためにフランクが書いた「Trois pièces（3つの小品）」のうち、その最終曲を締めくくるものが英雄的小品である。この曲は、口短調という調性を持ちながらも、中間部のコラールは優しく、最後は口長調となり、伝統的なフランス風序曲のリズムを持ったファンファーレへとつながる。

【プロフィール】

森武靖子 (パイプオルガン)

国立音楽大学大学院修士課程にて吉田實氏に師事。ドイツ国立トロッシゲン音楽大学大学院古楽科修士課程にて L.ギエルミ氏に、チェンバロを H.キルバルト女史に、通奏低音を A.リナルディ氏に師事。2000年「第12回 J.S.バッハ国際コンクール」(ライプツィヒ) セミ・ファイナリスト。その後、ウィーン国立音楽大学大学院修了後の課程にて M.ラドゥレスク氏に師事。日本ならびにスイス、ドイツ、中国でのソロ・リサイタル、また、合唱・アンサンブル等におけるオルガニストを務める他、CD リリース等の活動を行う。2014年、J.S.バッハのオルガン作品全曲演奏会を完結し、現在、二巡目の全曲演奏シリーズに取組中。セブンスデー・アドベンチスト東京中央教会、セブンスデー・アドベンチスト教団草苺オルガン・オルガニスト。日本オルガニスト協会会員。

SymVoice (合唱)

2014年夏、東京中央教会での追悼演奏会をきっかけに結成。現在18名で活動中。8声の曲を中心に、中世から現代までの幅広い時代のアカペラの宗教曲を中心に、今まであまり日本で歌われていない曲を紹介することを目的としている。グループ名称は、Sym=調和、Voice=声、から作った造語。

及川 律 (合唱指揮)

歯科医師。米国ネブラスカ州ユニオンカレッジ卒業。クレイトン大学大学院歯学部(歯学博士)。米国ジョージア州エモリー大学大学院神学部修士修了(礼拝学および讃美歌学専攻)。米国ミシガン州アンドリュース大学大学院音楽学部合唱指揮専攻。6歳よりバイオリンを細野栄一氏に、14歳で指揮を長谷川朝雄氏に師事。以後バイオリンを清水恭子氏、ロバート・ワルターズ氏、室内楽をカーラ・トリンチャック氏、合唱指揮をスティーブン・ゾーク氏、管弦楽指揮をロバート・ワルターズ氏、ビオラダガンバをメリーアン・バラード氏、キャサリン・マインツ氏、通奏低音をウェブ・ウィギンズ氏に師事。セブンスデーアドベンチスト東京中央教会聖歌隊指揮者。SymVoice 主宰。米国合唱指揮者協会会員

SymVoice

Soprano 1	Alto 1	Tenor 1	Bass 1
渡瀬 雅子	内藤 千鶴	小野上 真也	譜久島 彰
村岡 紀子	若月 牧子	新田 聡	加藤 正人
有田 知子			
Soprano 2	Alto 2	Tenor 2	Bass 2
根本 愛子	新田 純子	稲見 圭吾	土屋 ブルーノ
池田 愛弥	元津 千恵子	萩野 圭一	藤森 剛士
譜久島 のぞみ			